

指揮棒のおはなし

~ How To Conduet Music ~

Vol. 1



PICKBOY
NAKANO CO., LTD.

Introduction

指揮棒の魔法

まるで指揮棒に音符が からまっているような

私は指揮者の堺武弥まかいたけやと申します。これから、指揮者と指揮棒、そして「指揮をするということ」についてお話していきたいと思います。

まず最初にあえて言ってしまうと、指揮棒は決して“魔法の杖”ではありません。ひと振りするだけで素晴らしい音楽が出現するような魔法の指揮棒があるなら、何が何でも手に入れたいものです。でも、普通の指揮棒でも、奇跡を生むことはできます。

今私は長さ 38cm の長さの指揮棒を使っているのですが、オペラでは少し長めの 40cm を使っていました。その

オペラは予算の関係で合唱指揮も副指揮者もいなかったのですが、40cm の指揮棒によってオーケストラから歌手、合唱、そしてお客さんまでがひとつになり、オペラが全部自分のものになった感覚を得ました。まるで指揮棒に音符がからまって、指揮棒 1 本ですべてを自在に操れるような奇跡的な体験でした。



指揮棒＝拡声器!?

指揮棒というのは、指揮者の意図を大きくわかりやすくする“拡声器”だと思います。

昔は棒で床を叩いてテンポを指示したりした時代もありますが、モーツァルトの頃は、指揮棒を持たず手で振るのが主流でした。それがなぜ指揮棒を持つようになったかという、諸説ありますが、だんだんオーケストラの人数が多くなってきて、手だけでは全体に指示が伝わりづらくなったからで

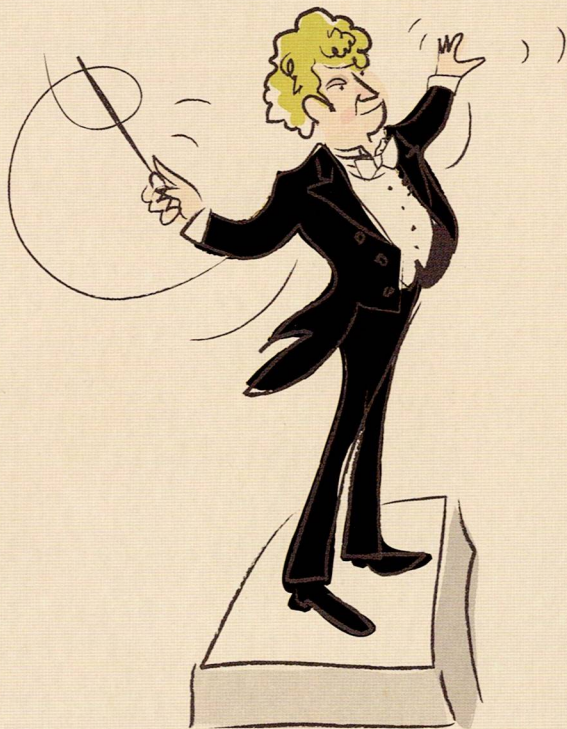
はないかと私は思っています。実際に試してみるとわかりますが、指揮棒を持つと、オーケストラの隅々まで伝わる感覚があるんです。

現在、小澤征爾先生は指揮棒を持たないスタイルで定着していますが、それは目の前に自分の音楽の宇宙があって、それに指で色づけをしていく。楽団員はその宇宙を見ながら演奏するので、指揮棒はいらないのだと思いますよ。見る人を引き込んでしまう力があるので、もう「指揮棒で伝える」必要はないのかもしれない。



Chapter 1

指揮するということは



予備拍に、全身で イメージを伝える

最初に私は、「指揮棒は魔法の杖ではない」と言いました。ではいったいどんな使い方をしているのかという

と、「こういう音を出したい」と頭に描いたイメージを、音が出る前の予備拍において振り方とか息の吸い方、表情などで演奏者に伝えるための、いわば“予備の杖”とでもいうものです。もちろん指揮棒をどう振るかも重要

ですが、例えば目線とか指揮棒の握り方、左手の身振りなど、全身でイメージを伝えます。大切なことは、それは音が出る前、つまり予備拍に行かなければならないということです。

指揮者というのは棒を振り続けてはいますが、プロのオーケストラはずっと指揮を注視しているわけではありません。指揮者の大きな仕事は、コンサートマスター（コンマス）との対話になります。それも言葉ではなく、指揮棒と自分の身体でコンマスと会話し、コンマスが認めた時点で、オーケストラ全体にそれが行き渡るといえることが多いです。だからコンサートマスターと意見が合わない、本番の出来が散々なものになるだろうという予想がつかます。

指揮のテクニックは、 目的をかなえるための 手段

では、指揮者になるには、どのような勉強をすればいいのでしょうか。

日本では、音大の指揮科出身の人が多いですが、指揮の勉強の仕方はいくつかの“流派”のようなものが

あります。有名なのは小澤征爾さんの先生である斎藤秀雄氏が提唱した“斎藤メソッド”で、これに沿って勉強する場合、指揮棒を振る“型”から入ることが多いです。

例えばフランスでは、音楽大学の指揮科に入ると、いきなり歌劇場やオーケストラの副指揮者をやらされて、半年後くらいに辞めなかった人を集めて専門教育をするということもやっているそうです。実際には7割くらいが辞めるそうですが、まず適性を見て、その後でテクニックを教えるということなのでしょう。

ドイツでは最近、ピアノでオペラ歌手の練習の伴奏をする“Korrepitor（コレペティートル）”から指揮者になる人が多いです。ベテランのコレペティートルは、歌手の息遣いを感じながら弾いていくので、まさに指揮者いらず。当然指揮を振っても上手ですよ。

指揮棒は音を出しません、彼らのように、実際にピアノなどで音を出す感覚で振るのが一番いいのではないかと思います。だから、私自身は指揮は型から入らない方がいいと思います。指揮棒を振るテクニックというのは、「イメージした音を出す」という目的をかなえるための手段ですからね。



指揮者は コーディネーター

指揮者の仕事というのは、演奏するホールの響き方とか、その日の気温や入るお客さんによっても変化する雰囲気を感じ取って、その場にぴったり合うように音楽を形作ることだと思っています。特にホールの響き方にはいつも気をつけていて、オーケストラのバランスもその日によって変えます。

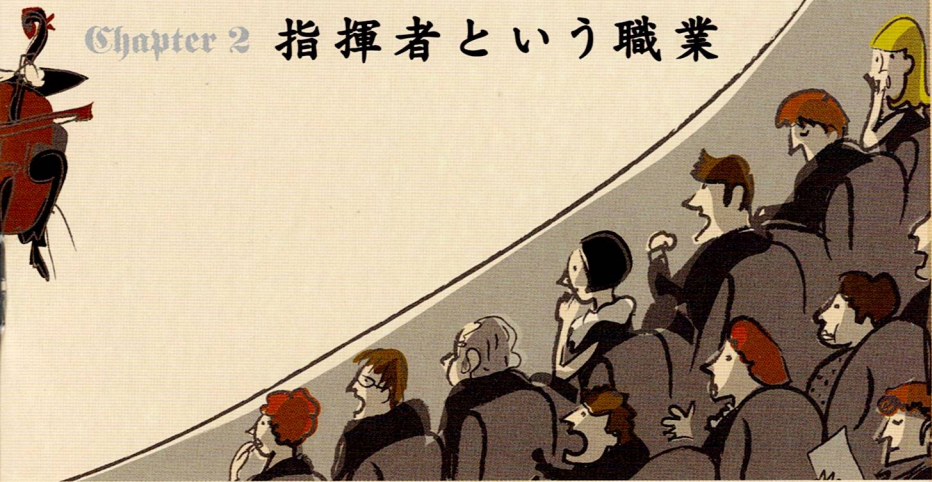
例えば本番で「今日は低音を厚めにした」と思ったら、音が出る前から、コントラバスのリーダーに目で指示を出しておきます。

指揮者は、いわば“コーディネーター”ですね。少なくとも私はそうです。まず楽団員がステージに入っ

て行くときのお客さんの反応から始まって、拍手の大きさや音の高さを感じながら、「今日はこうしよう」とイメージを作っていくんです。私の大好きな言葉に、レナード・バーンスタインの「音楽は与えるものではなく共有するものだ!」というものがある。あって座右の銘にしているのですが、まず「お客さんがその日どんな音楽を聴きたいのだろうか」ということをいつも考えています。その意味で、その場に合った最高の音楽をオーケストラと作っていくのが、僕の仕事だと思っています。

でもそれが難しく、最初から最後までお客さんと一体になれたと思うような演奏会は、1年に1回、2回あるかなというくらいですね。それは

Chapter 2 指揮者という職業



指揮者をしていて一番嬉しい瞬間です。

お客さんを 強く意識する

私は指揮者になる前は、サクソを吹いていました。演奏者としていつも考えていたことは「その時できる最高のパフォーマンスをする」ということでしたが、指揮者になるとまったく視点が変わりました。いち演奏者としてトゥッティに入ると、お客さんに対する意識よりも、演奏者同士でのアンサンブルをどうしても強く意識します。でも指揮者になってからはお客さんを強く意識していて、「このホールのこの席では、どんな聞こえ方をしているのだろうか」ということも考えるよう

になりました。

結論を言うと、ホールとしてはオランダ・アムステルダムのコンサートヘボウが最も良いということがわかりました。というのは、どの席で聴いても指揮者の位置と同じ音がするんです。奇跡的なホールと言えるのではないのでしょうか。

逆に難しいホールはウィーンの楽友協会（ムジークフェライン）で、その日の条件によって、ものすごく響き方が変わるんです。舞台も狭く、オーケストラの配置を普段と変える必要もあるので、バランスの取り方も難しい。歴史ある素晴らしいホールですし、ここで指揮をするということはあるものすごく光栄なことではありますが、指揮者にとっては実は嫌なホールですね。

Chapter 3

指揮をしよう！

「指揮＝ テンポを刻むこと」 ではない

では実際に指揮をしてみましょう。

「指揮棒でテンポを刻むのが指揮者の一番の仕事」と誤解する方もいますが、テンポや音量の指示を出すことは、指揮者の仕事の中では2割にも満たないのではないのでしょうか。特にプロのオーケストラの場合、これらをリハーサルで指示するようなことはほとんどありません。

日本では「*f*は大きく、*p*は小さく」とよく言いますが、それは感情が先にあつての話なんです。大切なのはどう*f*、どう*p*を出すかということ。テンポも、その日の音楽の流れというものがありますから、要所要所でその流れを作っていくだけで、必死になつて決まったテンポを振り続けることに意味はないと思います。

指揮をしようとするとしてもまず「○拍子の振り方は」と考えすぎてしまう人が多いのですが、指揮棒

を持つ右手の仕事は、それよりも棒のスピードや点の作り方、柔らかさなどで「どういう音を出して欲しいのか」を表現することです。同じテンポでも、振り方によってテンポ“感”が違ってきますから。

気持ちを込めて指示を出せば、CDの演奏も変わる！?

CDに合わせて指揮をすることを趣味にしている人も多いと思いますが、私が指揮の勉強をしているときに言われたことは、「CDに合わせて右手でテンポを刻むことはするな」ということでした。では何をするかということ、左手と顔で音楽の表情を付ける練習です。

指揮者は、予備拍において、左手や顔の表情でどれだけ自分の意図を伝えられるかが勝負になります。曲に合わせて表情を変えるのは「酔つている」だけで「指揮」ではないんです

ね。実際のステージでは、音が出る前に伝えて、イメージした音を出してもらわなければなりませんから。

趣味としてCDに合わせて振る場合でも、同じようなことをしてみてもいいでしょうか。自分が好きな指揮者の表情や身振りなどを研究して、CDの演奏に対しても予備拍で指示を出してあげる。その後に右手でテンポを入れるという順番です。ただテンポに合わせて振っているだけでは、指揮棒がもったいないですよ(笑)。

指揮というのは右手の運動ではなく、全身と精神までも使って行なうものなんです。頭の中で考えていることも伝わりますから。最初は音楽に合わせて右手を振ることも楽しいですが、慣れてきたら気持ちを含めて、やりたい音楽を表現し



てみてください。そうすると、同じCDでも聞こえて来る音楽が変わると思います。

Chapter 4

指揮棒の選び方

長すぎる指揮棒は、 かえって見にくい

最初に「指揮棒は指揮者の指示を隅々まで届ける拡声器」という話をしましたが、指揮棒の長さというのは、拡声器の音量の大きさと同じ意味を持ちます。長ければ長いほどより大人数に指示が通りやすくなりますが、その分扱いづらくなるんです。例えば拡声器の音量が大きいと、目の前の人はいささか感じるし、すぐ音が割れてしまいますよね。だから、自分に合った長さの指揮棒を選ぶことは大切です。身の丈に合わない、長い指揮棒を使っていると、逆に見にくくなってしまいますから。プロの指揮者でも、特に若い人の中では、短い指揮棒を使うことが主流になりつつあります。

これは私とPICKBOYの出会いとも関係があるのですが、以前はグリップのコルクの形状や大きさと指揮棒の長さの組み合わせが限られていて、「このグリップが一番手にフィットするのに、棒が長すぎる」と感じることもありました。現在は、グリップ形状と長さの



組み合わせが多様になっています。

グリップ形状、材質…。 自分に合った指揮棒を 選ぶ

もう一つ、指揮棒に求められるのは、重量のバランスです。ちょうどグリップと棒の間、指で保持する位置に重心がくるのがベストで、ドイツなどではそれがかなり重視されていますが、日本ではあまり考慮されていませんでした。これも、現在のPICKBOYのラインナップではほとんど改善されています。ちなみに、型番に「NCS」「FTS」のように「S」が付いているモデルは、私が監修した指揮棒です。



グリップの形状は、握ってみて自分に合うものを選びたいと思います。握り方も「こうでなくてはならな

い」というものはないと考えています。日本ではこうして様々な製品が出ていますが、海外では指揮棒は自分で作る人が多いんです。

また、海外では木製の指揮棒が主流ですが、日本は湿度の変化が大きいので、木は曲がることがあって、そうすると微妙にバランスが悪くなってしまいます。グラスファイバーやカーボンならそういうことはありません。特にカーボン製はグラスファイバーに比べてしならないので、打点がぶれないのが良いですね。何より軽いのがありがたいです。

まず、自分に合った指揮棒を選ぶところから始めたいですね。

My
Choice

～堺 武弥が選ぶお気に入りグッズ～

五線ボールペン

NOLIGRAPH

(ノリグラフ)

made in Germany

一度で五線が書けるドイツ製のボールペンです。私がベルリンで仕事をした際に、ベルリン・フィルのメンバーからもらって存在を知ったのですが、ちょっと音符を書きたい場合などにとっても便利です。専用の替え芯もありますので安心ですね。



NOLIGRAPH (ノリグラフ) 価格 ¥1,680 (税込)

※専用交換用インク 価格 ¥630 (税込)

PICKBOY
NAKANO CO., LTD.